

# 京都光華女子大学における司書課程の歩み

阿部一晴  
伊藤美加  
近藤友子  
楠 藤 香 織

## I はじめに

司書とは、都道府県や市町村の公共図書館等において資料の選択、発注及び受け入れから、分類・目録作成、貸出業務、読書案内（レファレンスサービス）など図書館業務全般を担当する専門職員のことである。司書資格は、公共図書館や大学図書館等で司書として勤務するために必要な資格として、「図書館法」に定められている図書館学に関する所定の単位を修得した者に与えられる。図書館等における司書の採用は狭き門であり、司書資格を持っていても司書として勤務することは実際には非常に難しいのが実状である。一方、司書資格そのものは人気の高い資格の一つであり、その取得を目指す者も多い。司書資格を得るには、定められた受講要件（大学に2年以上在学（短期大学卒業者を含む）し、62単位以上を修得しているか又は高等専門学校を卒業していることなど）を満たす者が、毎年全国各地で開催される司書講習を修了するという方法もあるが、最も一般的で取得者も多いのが、大学（短期大学を含む）で司書資格取得に必要な科目を履修し、卒業を以て資格を得ることである。文学部など人文系分野の学部を有する大学を中心に司書資格取得の課程が設置されている。文部科学省によると、平成27年9月1日現在4年制大学158校（国立10・公立4・私立144）、短期大学58校（公立3・私立55）が司書養成科目開講大学として挙げられている。同年における全国の4年制大学数が779校、短期大学が346校であることを考えると、その比率はそれほど高い訳ではない（全4年制大学の20.3%・全短期大学の16.8%）ことがわかる。

京都光華女子大学（以下、本学）においても、昭和39年4月の文学部 日本文学科、英米文学科開設（当時の校名は光華女子大学）後、文部省（現文部科学省）に昭和45年度からの司書課程の設置を申請し、認可

を受けている。その後、毎年多くの司書資格取得者を輩出し、平成28年3月までにその数は合計2,957名に上っている。一方、昨今の学びの専門分野に対するニーズの移り変わり等、高等教育を取り巻く環境の変化に合わせるため、本学も学部・学科の改組を進めている。本学創立の発祥分野であるとも言える文学の分野を引き継いでいる人文学部文学科も平成26年度から募集停止となった。これにともない、本学における司書課程も当該学科学士の学年進行にともない廃止することになった。（司書課程は全学部・全学科で履修可能であったが、その分野の特性もあり、履修者の中心は文学科（以前の日本文学科・日本語日本文学科）の学生であった）

本学における司書資格課程は、他の多くの大学・短期大学と同様に要卒単位に参入されない自由科目に位置づけられている（後述する特定年度入学生対象のキャリア形成学部カリキュラムを除く）。すなわち、基礎・教養科目と専門科目からなる卒業所要単位（本学では128単位）に加えて、別途25もしくは26単位（選択必修科目による）の修得が資格取得には必要となる。このため、受講する学生にとっては非常に負担が重いものとなっている。当初資格取得を目指したものの、途中で挫折をしてしまう学生も多い。しかし、実際に受講し司書資格を取得した学生には、司書課程での学びを高く評価してくれる者が多い。この課程で学修する内容は当然図書館法という法律に規定されたものに従っているが、これまでに積み重ねてきた本学独自の教育方法も多く取り入れられており、これらが受講生の高い満足に繋がっているのではないかと評価している。

本稿では、今般本学でも長い歴史のある司書資格課程を閉じるにあたり、この課程に様々な形で関わった教職員が協力し、これまでの本学の司書課程の歩みを振り返ることとしたい。

## Ⅱ 司書課程カリキュラムの概要と変遷

平成 20 年 6 月に図書館法が改正され、平成 21 年 4 月に図書館法施行規則の一部を改正する省令が公布された。この法改正によって、新しい「図書館に関する科目」が示され、司書資格を取得するための科目が定められた。それによって、図書館司書課程を設置している大学においては、従来の司書講習のために定められた科目（旧カリキュラム）に替え、この新しい科目（新カリキュラム）に基づいてカリキュラムを編成することになった。

本学においては、平成 22 年度の学部改組を機に、旧カリキュラムから新カリキュラムへ、順次対応する科目を開設していくこととなった。以下に、年度別にその概要を述べる。

### 1. 平成 21 年度以前

平成 21 年度以前入学生のカリキュラム（旧カリキュラム）を表 1 に示す。司書資格を目指す学生は、例えば文学部日本語日本文学科や人間関係学部人間関係学科臨床心理学専攻のように、それぞれ所属する学部・学科の専門課程を履修しながら（それに加えて非要卒単位の自由科目として）司書課程を履修することになる。そのため、司書課程の基礎科目にあたる「生涯学習概論」や「図書館概論」、「メディア論」を 1・2 年次に、発展・実践科目にあたり演習形式が含まれる「資料組織Ⅰ・Ⅱ」や「情報サービス」を 3・4 年次に履

修するというように、年次進行に従い計画的に履修するように指導を行っていたが、それでも講義・演習の負担は大きいようであった。

### 2. 平成 22 年度・平成 23 年度

平成 22 年度に大幅な学部改組が行われ、「社会人として必要となる一定の知識・理解と汎用的な力（総合的社会人基礎力）の修得」を目指すキャリア形成学部が設置された。キャリア形成学部では、この総合的社会人基礎力の応用と実践の場として、学生が関心のある特定の分野を選びそれに関わる資格取得の支援をすることも特徴の一つであるが、司書もその目指す職業分野の一つとして位置づけられた。これに伴い、司書課程は、キャリア形成学部の専門教育課程の一部に組み込まれることになった。すなわち、この改組を機に、キャリア形成学部学生で司書資格を目指す者は、要卒単位として司書に関する科目を履修できるようになったのである。

平成 22 年度及び平成 23 年度入学生のカリキュラム（新カリキュラム）を表 2 に示す。司書に関する科目を非要卒単位として履修する学部（表 2 の上段）と、要卒単位として履修する学部（表 2 の下段）では、配当年次が若干異なることが示されている。

なお、平成 22 年度・平成 23 年度入学生は旧カリキュラムが適用されることから、新カリキュラムから旧カリキュラムへの読み替えを行うことにより対応した。読み替え表を表 3 に示す。旧カリキュラムの「情報サー

表 1 平成 21 年度以前入学生対象の司書に関する科目のカリキュラム

学科目	授業形態	1単位当たり 授業時間数	単位数					必・選	備考
			1年	2年	3年	4年	単位計		
生涯学習概論	講義	15			2		2	必修	
図書館学概論	講義	15			4		4	必修	
情報図書館学	講義	15			4		4	必修	
資料組織Ⅰ	講義	15			3		3	必修	
	演習	30							
資料組織Ⅱ	講義	15			3		3	必修	
	演習	30							
情報サービス	講義	15			3		3	必修	
	演習	30							
児童サービス	講義	15			2		2	必修	
情報検索	演習	15			2		2	必修	
メディア論	講義	15			2		2	選択必修	
コミュニケーション概論	講義	15			2		2	選択必修	2科目4単位必修
現代の図書館	講義	15			2		2	選択必修	

表2 平成22年度・平成23年度入学生対象の司書に関する科目のカリキュラム

◆人文学部・健康科学部入学生

学科目	授業形態	1単位当たり 授業時間数	単位数					区分	図書館法施行 規則科目名	備考
			1年	2年	3年	4年	単位計			
生涯学習概論	講義	15	2				2	必修	生涯学習概論	1科目選択必修
図書館概論	講義	15	2				2	必修	図書館概論	
図書館制度・経営論	講義	15		2			2	必修	図書館経営論	
図書館サービス概論	講義	15		2			2	必修	図書館サービス論	
図書館情報資源概論	講義	15		2			2	必修	図書館資料論	
情報資源組織論	講義	15			2		2	必修	資料組織概説	
図書館情報資源特論	講義	15			2		2	必修	専門資料論	
情報資源組織演習	演習	30			2		2	必修	資料組織演習	
情報サービス論	講義	15			2		2	必修	情報サービス概説	
情報サービス演習	演習	30			2		2	必修	レファレンスサービス演習、情報検索演習	
児童サービス論	講義	15			2		2	必修	児童サービス論	
図書・図書館史	講義	15	2				2	選択	図書及び図書館史、資料特論	
図書館サービス特論	講義	15			2		2	必修	情報機器論、図書館特論	

◆キャリア形成学部入学生

学科目	授業形態	1単位当たり 授業時間数	単位数					区分	図書館法施行 規則科目名	備考
			1年	2年	3年	4年	単位計			
生涯学習概論	講義	15		2			2	必修	生涯学習概論	1科目選択必修
図書館概論	講義	15		2			2	必修	図書館概論	
図書館制度・経営論	講義	15			2		2	必修	図書館経営論	
図書館サービス概論	講義	15			2		2	必修	図書館サービス論	
図書館情報資源概論	講義	15			2		2	必修	図書館資料論	
情報資源組織論	講義	15			2		2	必修	資料組織概説	
図書館情報資源特論	講義	15			2		2	必修	専門資料論	
情報資源組織演習	演習	30			2		2	必修	資料組織演習	
情報サービス論	講義	15			2		2	必修	情報サービス概説	
情報サービス演習	演習	30			2		2	必修	レファレンスサービス演習、情報検索演習	
児童サービス論	講義	15			2		2	必修	児童サービス論	
図書・図書館史	講義	15		2			2	選択	図書及び図書館史、資料特論	
図書館サービス特論	講義	15			2		2	必修	情報機器論、図書館特論	

ビス」は、講義と演習が含まれ通年で開講していたことから、単位数等を勘案し、新カリキュラム「情報サービス論」(2単位 30時間)は旧カリキュラム「情報サービス」(3単位 60時間)、新カリキュラム「情報サービス演習」(2単位 60時間)は旧カリキュラム「情報サービス」(3単位 60時間)と旧カリキュラム「情報検索」(2単位 30時間)のように、それぞれ読み替えの工夫を行った。

3. 平成24年度以降

平成24年度以降入学生のカリキュラム(新カリキュラム)を表4に示す。「図書館情報技術論」と「図書館総合演習」が追加されたことと、キャリア形成学部入学生対象のカリキュラムにおいて、比較的早くから特定の職業分野の学習に入れるよう、複数の基礎科目

で配当年次を下げたことが主な変更点である。

Ⅲ これまでの具体的な教育方法と成果

ここから、上述したカリキュラムのうち、本学における特徴的な科目として「共同演習」を具体的に取り上げ、その教育内容や方法と成果等について述べる。

「情報サービス」等の演習科目においては、「共同演習」という本学独自の特色ある教育方法を20年以上にわたり取り入れてきた。現在でこそ、アクティブラーニングや学生主体の授業運営が大学教育において導入されるようになってきたが、従来の講義形式の授業が中心であったその当時としては、非常に画期的な試みであったと言えるだろう。

表3 新カリキュラムから旧カリキュラムへの読み替え表

図書館法施行規則 科目名	平成22年度以降入学生用					平成21年度以前入学生用				
	学科目	単位数	時間	人・健 配当	キ 配当	旧科目	単位数	時間	配当	
生涯学習概論	生涯学習概論	2	30	1~4	2	生涯学習概論	2	30	1~4	必修科目
図書館概論	図書館概論	2	30	1~4	2	図書館学概論	4	60	1~4	
図書館経営論	図書館制度・経営論	2	30	2~4	3					
図書館サービス論	図書館サービス概論	2	30	2~4	3	情報図書館学	4	60	2~4	
図書館資料論	図書館情報資源概論	2	30	2~4	3					
資料組織概説	情報資源組織論	2	30	3・4	3	資料組織 I	3	60	2~4	
専門資料論	図書館情報資源特論	2	30	3・4	3					
資料組織演習	情報資源組織演習	2	60	3・4	3	資料組織 II	3	60	3・4	
情報サービス概説	情報サービス論	2	30	3・4	3	情報サービス	3	60	3・4	
<small>レファレンスサービス演習、情報検索演習</small>	情報サービス演習	2	60	3・4	3	情報サービス、情報検索	3,2	60,30	2~4	
児童サービス論	児童サービス論	2	30	3・4	3	児童サービス	2	30	2~4	
図書及び図書館史、資料特論	図書・図書館史	2	30	1~4	2	メディア論	2	30	1~4	選択科目
情報機器論、図書館特論	図書館サービス特論	2	30	3・4	3	現代の図書館	2	30	2~4	
コミュニケーション論	—					コミュニケーション概論	2	30	2~4	

表4 平成24年度以降入学生対象の司書に関する科目のカリキュラム

## ◆人文学部・健康科学部入学生

学科目	授業形態	1単位当たり 授業時間数	単位数					区分	図書館法施行 規則科目名	備考
			1年	2年	3年	4年	単位計			
生涯学習概論	講義	15	2				2	必修	生涯学習概論	1科目 選択必修
図書館概論	講義	15	2				2	必修	図書館概論	
図書館情報技術論	講義	15			2		2	必修	図書館情報技術論	
図書館制度・経営論	講義	15			2		2	必修	図書館制度・経営論	
図書館サービス概論	講義	15			2		2	必修	図書館サービス概論	
児童サービス論	講義	15				2	2	必修	児童サービス論	
情報サービス論	講義	15				2	2	必修	情報サービス論	
情報サービス演習	演習	30				2	2	必修	情報サービス演習	
図書館情報資源概論	講義	15			2		2	必修	図書館情報資源概論	
情報資源組織論	講義	15				2	2	必修	情報資源組織論	
情報資源組織演習	演習	30				2	2	必修	情報資源組織演習	
図書・図書館史	講義	15		2			2	必修	図書・図書館史	
図書館サービス特論	講義	15				2	2	選択必修	図書館サービス特論	
図書館情報資源特論	講義	15				2	2		図書館情報資源特論	
図書館総合演習	演習	30				2	2		図書館総合演習	

## ◆キャリア形成学部入学生

学科目	授業形態	1単位当たり 授業時間数	単位数					区分	図書館法施行 規則科目名	備考
			1年	2年	3年	4年	単位計			
生涯学習概論	講義	15	2				2	必修	生涯学習概論	1科目 選択必修
図書館概論	講義	15	2				2	必修	図書館概論	
図書館情報技術論	講義	15			2		2	必修	図書館情報技術論	
図書館制度・経営論	講義	15		2			2	必修	図書館制度・経営論	
図書館サービス概論	講義	15			2		2	必修	図書館サービス概論	
児童サービス論	講義	15			2		2	必修	児童サービス論	
情報サービス論	講義	15			2		2	必修	情報サービス論	
情報サービス演習	演習	30			2		2	必修	情報サービス演習	
図書館情報資源概論	講義	15			2		2	必修	図書館情報資源概論	
情報資源組織論	講義	15			2		2	必修	情報資源組織論	
情報資源組織演習	演習	30			2		2	必修	情報資源組織演習	
図書・図書館史	講義	15	2				2	必修	図書・図書館史	
図書館サービス特論	講義	15				2	2	選択必修	図書館サービス特論	
図書館情報資源特論	講義	15				2	2		図書館情報資源特論	
図書館総合演習	演習	30				2	2		図書館総合演習	

### (1) グループによる体験学習

司書は図書や雑誌だけでなく、情報総体を扱う仕事である。しかし、インターネット等にある情報は、まとまりのない断片的情報が主になる。司書は、利用者が求めるほんやりした「探索目的」つまりテーマに応じて、断片的情報を集め、利用者と相談しながら、利用者が深層的に持っている要求を新たなテーマとして組み立てる。このような仕事をするには、地図の無い世界で、どんな風に地図を作るのかというスキルが必要になる。このスキルは体験的に習得するのが最も効果的と考えられる。

このような体験学習は、社会ではプロジェクトの計画、経過と達成としてよく知られている。在学中にこれらを体験することで、社会に出ても、司書だけでなく様々な問題・課題を解いていくのに役立つと考えられる。

### (2) 上級生による支援

特定のテーマを5～6名のグループで調べていく。側には常に教員と、すでに司書課程を修了した上級生とがいて、スケジュールや方法について支援する。TAと同様、あるいはそれ以上に司書課程履修学生のロールモデルとして働き、共同演習の厳しさや辛さを味わった者同士にしか通じえない、共に学ぶコミュニティ＝学びの共同体を形成していく。

この上級生は助勤と呼ばれ、「葛野図書倶楽部 2001」から選ばれる。「葛野図書倶楽部 2001」は、司書課程を履修する有志によって平成 13 年 8 月に発足し、賢風館 3 階にある予備室（屯所と呼ぶ）にて、図書を選定・購入し図書リストを作成、その貸し出し、機関誌『Truth』の発刊等を通じて、司書科目を履修する受講生の便宜を図る等、さまざまな活動を開始した。倶楽部は平成 23 年 3 月の解散まで 10 年強続き、本学における司書課程の充実・発展に貢献したと言える。

### (3) 段階的なブラッシュアップ

共同演習では、最初に「着手発表」といって、ほんやりした状態で、テーマ内容を発表する。その際に、教員や助勤からいろいろな質問が出てくる。その質問を再度グループ内で検討して、新たな目的や方法を考え出す。

次に「中間発表」を行う。ここではほぼテーマが確

立し、それに必要な情報も集められて、あとは整理していくだけになるのが望ましい。

「最終発表」は、完成した整理の結果（作品）をリーダーが発表する。完成した作品は、各グループの代表、助勤、教員によって評価し、ランキングがつけられる。

複数の発表の機会を設けることによって、グループのメンバー以外の第三者の目によるチェック機能が働き、より洗練された内容に改善されることになる。

### (4) 競争原理の積極的活用

グループの中での役割（班長、副班長、書記…）や発表ランキングに基づいて、個人の成績が決まる。例えば班長をした学生は +20 点、最終発表で 1 位の班の班員全員に +30 点等、全ての活動が点数化され、それが個人ごとに積み上げられることが事前に公表される。互いの競争心をあおると同時に、努力すれば報われることが、客観的な数値として個人にフィードバックされる。グループの中で、あるいはグループ間で、自然な競い合いが生じることにより、お互い影響を及ぼし合いつつ、それぞれが磨き上げられる結果となる。

## Ⅳ 新カリキュラム後の司書課程の授業

本学の司書課程は長きに亘って、多くの図書館に精通した先生方によって築かれてきたといえる。時代に適した内容と、前述した共同演習等におけるグループでの積極的な活動を早くから取り入れた、活動的な授業を進めてきた点は、その特色を非常によく表している。図書館に関わる様々な奥深い内容を講義において伝えるだけでなく、グループでの協力という体制や競争等の心理的効果も巧みに取り入れて授業を積極的に進めるなど、今日広まりつつあるアクティブラーニングの考え方が早くから体现されていたとも言えるだろう。司書は多くの情報の中からテーマに適した正確な情報を探し出さなければならない。利用者の「探索目的」に合わせた資料の収集や検索技術の研鑽を積むことが求められるが、地道な探索作業は退屈でもあり、集中力も欠けやすい。その点をグループによる体験学習として教員や上級生等の協力体制が望める状態にすることで支援し、機関誌等も刊行することで情報を発信していく魅力ある司書課程の情報の引き出しが多数

ある点は本学司書課程の大きな特色であると自負できる。

新カリキュラムにおいて、従来14科目20単位の履修が必要であったものが、13科目24単位と変更になり、科目数は減っているが修得すべき単位数は増えており、内容的にはより充実したものが求められるものとなった。それに応じて、受講する学生には学びの量が増えて負担が重くなったといえるだろう。特に必修科目は、旧カリキュラムでは12科目であったが、新カリキュラムでは「基礎科目」、「図書館サービスに関する科目」、「図書館情報資源に関する科目」という区分に分けられることで「図書館サービス」や「図書館情報資源」という内容をより深く考えさせられるものとなった。また情報技術の発達なども背景として「図書館情報技術論」や「情報サービス論演習」など情報検索技術に重点がおかれる科目が配当され、ネットワークや情報探索等における知識と技術を学ぶことが一層強く求められるものとなった。近年のアクティブラーニングなどの考え方では、教員による一方的な講義形式の教育だけでなく、学修者自身が能動的に考え、問題発見・解決へと導く力をつけることも求められる。そのためにはグループ・ディスカッションやグループワークを行うことも有効であり、図書館もその学びの場として注目されるものとなっている。受講生にとっては知識だけでなくネットワーク関係を駆使できる技術力なども必要とされる時代となった。こうした点からもわかるように、多くの知識や技術が求められる司書資格の学習を続けていくことは大きな負担とも考えられるが、司書課程を履修している多くの本学学生が、積極的に学びを進めていることは非常に特徴的で、また印象深く感じられる。

以下では、具体的な司書課程授業の中で大学図書館を活用した事例として「情報サービス論演習」と「図書館情報技術論」を取り上げ、司書課程を学ぶ学生たちの積極的な学びについて述べる。

### 1. 「情報サービス論演習」における大学図書館の活用

今日、図書館で資料を探す際にはパソコンを利用した情報検索が欠かせない。OPAC (Online Public Access Catalog) と呼ばれる、利用者へ供されるオンラインの蔵書目録の情報端末を用いての資料検索は、多くの図書館で行われている。また調査・研究に使用

できる様々なデータベースも今日では多くの図書館で利用することが可能である。こうした資料探索や調査を効率的に行えるように、司書には情報機器を活用できる知識と技術が求められているが、日々進化していく情報技術や多くのデータベースを効率的に活用していくことは容易なことではない。そのためには、情報検索経験の積み重ねや探索技術の習得が求められる。「情報サービス論演習」では、情報化社会に対応した知識や技術を学ぶために、毎回の授業はパソコンを利用できる情報教育センターの情報実習室で行っている。一方、司書課程を学ぶものとしては、パソコンを駆使する技術とともに紙媒体である図書や雑誌等の資料も同様に使いこなせるように学びを進めていく必要がある。実際に図書館に所蔵されている多くの資料について理解する必要があり、授業では本学の大学図書館を用いて現物の資料を確認したり、資料を探したりする時間を多く取り入れた。特に「情報サービス論演習」は通年の授業であり、一年を通じて図書館を利用しながら学べるよう授業を工夫している。前期では、主にレファレンスサービス (reference service) と呼ばれる、利用者からの質問に対して図書館員が必要とされる情報の提供あるいは資料そのものについての探索、提供、回答などの方法を学び、後期ではパスファインダー (pathfinder) という特定のテーマに関する文献や情報の探し方・調べ方などを提供するものをグループ活動での製作課題として学びを深めていった。簡単に通年の流れをまとめると次のようになる。

<前期 目的：各自でレファレンスサービス問題を調査し、図書館の資料検索・調査と参考図書等の内容理解とデータベース等の検索技術を向上させる>

- ① 4月：「情報サービス論演習」、レファレンスサービスについての学び
- ② 5月～6月：レファレンスサービスの実際：複数のレファレンス問題の探索調査  
⇒図書館の資料やデータベース等を用いて各自が回答を求めて調査活動
- ③ 7月：各自の調査報告・発表
- ④ 8月：宿題：パスファインダーについての調査

<後期 目的：パスファインダーを製作するなかで

テーマに適した資料の探索と紹介ができる力をつける。

またグループ活動を通して責任ある行動と課題解決能力を培う

- ⑤ 9月：グループ、パスファインダーのテーマ、担当（役割）分担を決め、実行計画を作成
- ⑥ 10月～12月：パスファインダー製作活動：グループ活動による共同演習  
⇒図書館、情報実習室等を活用したグループでの活動作業
- ⑦ 12月～1月：グループによるパスファインダー製作発表・各人によるポスター製作発表

以上のような学びの過程の中で、教員のみならず本学の大学図書館司書による授業支援が通年において受けられる。全ての学びの段階に教員は関わっているが、特に上記②と⑥においては授業時間外においても受講生たちの活動が大学図書館等で行われることが多く、この段階では司書の協力・支援が大きく必要とされる。これらの段階の学びでは、図書館1階のアクティブラーニング・スペース（図1）で授業を行うことも多く、グループ活動のときは移動式の机やノートパソコンを積極的に活用している。パスファインダーに役立つ資料の検索だけでなく、データベース等の内容確認のためにノートパソコンをグループ毎で利用して、メンバー全員でスクリーンに表示された資料等について議論している様子は、新カリキュラムの学びの目的であるネットワークの知識や技術の習得に関わるものであり、大学図書館の資料・情報機器の活用が問題解決能力の学びに役立っていることが実感できる。また図書館での授業の際は、教員のサポートとして図書館の司書が学生の資料探索へのアドバイスをを行うことも刺激となり、司書課程を学ぶ学生にとっては実際に図書館の現場で働くプロからの助言は新鮮でかつ興味を引かれるものとなっている。レファレンス問題の探索などの際は、授業時間外にも、個人で図書館を利用して課題解決にあたる学生も多く、司書は調査に迷っているときにアドバイスを受けられる心強い味方となっている。



図1 図書館内アクティブラーニング・スペースでの司書課程授業

各自がレファレンス調査の報告・発表を行う③の段階や、グループで制作したパスファインダーについての最終発表、各個人がパスファインダー用ポスターを制作したことについての発表などは⑦で行われたが、この発表時にも司書に参加してもらい、受講生たちの発表に対してコメントの協力を得られた点は、本学の大学図書館の教育への積極的な学びの支援を示しているとともに、学生たちに寄り添う大学図書館の姿が反映されている。こうした点も本学司書課程を長い間支えている大きな柱の一つである。

以前は共同演習で行っていた段階的なブラッシュアップによる「着手発表」「中間発表」「最終発表」なども、現在の学びの過程の中で何度か行われる発表等に通じるものであり、時代の変遷のなかにも学びの本質の連なりが感じ取れる。競争原理についても同様であり、パスファインダーやポスター等は教員と司書、受講生全員の感想等を参考に上位1位～3位が決められ、選ばれた作品は図書館で1ヶ月程度実際に配布・掲示される。このことは受講生にとって刺激となり自然な競り合いも生まれ、お互いに良き影響を受けている。

## 2. 「図書館情報技術論」における実践体験

平成21年2月に出された「司書資格取得のための各科目の在り方」において、「図書館情報技術論」には、「コンピュータ等の基礎」、「図書館業務システム」、「データベース」、「コンピュータシステム等」についての解説や演習が求められている。情報化の流れは司書にデジタルデータ活用の知識や技術を求めるものとなっている。そのため、授業においても講義だけでなく、デー

タベースの演習やパソコン内部を見て、その構造を知ることなども取り入れている。また情報機器やそのシステムをより理解するために大学図書館の情報機器の見学や、大学の情報システム関係部門の協力によるサーバー室の見学などを取り入れている点が本学の「図書館情報技術論」の大きな特色である。

#### <大学図書館の情報機器等の見学>

大学図書館のなかでは様々な情報機器が利用されているが、本授業では、カウンター周辺機器と出入り口のブックディテクションシステム（BDS: Book Detection System）を中心に見学を行っている。BDSは、図書館の出入りに設置されているセキュリティシステムであり、未貸出資料などの持ち出しを防止する機能を持っているが、見学の際は司書による説明があり、実際にBDSを作動させるデモンストレーションを行うなどして見学者の興味関心を引き出す工夫をしている。また、カウンター周辺の貸出用端末などの動作環境説明については、司書課程を学ぶ学生には親しみやすく理解しやすい内容であるとともに、こうした様々な情報機器が図書館内にあることを改めて認識する良い機会ともなっている。また、司書になればこうした見学の説明なども行えるよう、機器の知識が必要であることを実感したという受講生も見受けられた。



図2 図書館見学でのBDSの説明

#### <サーバー室の情報システム機器の見学>

情報システム部門の協力を受け、学内サーバー室の見学と運用・保守を担当するシステムエンジニアから直接説明を受ける機会も設けた。大学図書館では、貸

出端末等の説明を受けたがそれらを裏側で実際に管理している場所でもあり、また大学全体の情報システムの関わりについても説明を聞くことができ、司書として視野の広がる内容を学ぶことができるものとなっている。図書館の情報管理や情報システムに関して身近に学ぶことができる良い機会でもあり、他では経験できない大変貴重な学びとなっている。



図3 サーバー室見学でのシステムエンジニアによる説明

\* 「図書館情報技術論」における大学図書館とサーバー室の見学の概略

#### 1. 大学図書館見学 (20分)

- ・カウンター周辺機器 見学・説明
- ・図書館入り口のBDS 見学・説明・デモンストレーション

(大学図書館からサーバー室へ移動)

#### 2. サーバー室見学 (20分)

- ・サーバー室見学
- ・サーバー等の情報システムについての説明・質疑応答

以上、「図書館情報技術論」における大学図書館やサーバー室の見学等について述べた。こうした見学等を通して司書課程を学ぶ学生は、大学全体としての情報システムの在り方や、大学図書館の存在及び司書の役割についての学びを深めている点が、新カリキュラム後の本学図書館司書課程の学びの特色ともいえるだろう。

ここでは、近年の情報化の時代に即した内容として「情報サービス論演習」と「図書館情報技術論」のみを取り上げたが、これ以外の「図書館サービス概論」



や「図書館情報資源概論」等においても大学図書館を活用した授業はなされており、各授業においても図書館員から受講生への適切なアドバイスや授業支援がみられる。こうした協力の姿勢は、司書課程を学ぶ学生にとっては図書館という現場を直接的に体感でき、司書について理解する良い機会となっている。また京都光華女子大学で司書資格を取得して同じく京都光華女子大学図書館で司書として働いている先輩もいることを授業を通して知ることもあり、司書課程を学ぶ学生にとっては力強い励みとなり、親しみやすい図書館の由縁にもなっていることと考える。

## V 図書館から司書課程科目への授業支援

本学図書館が司書課程における授業の支援を開始したのは平成25年7月からである。4月の授業開始から遅れること3か月たってからというのは、本学司書課程の責任者であった谷口敏夫教授の体調不良、そして突然のご逝去という大きな悲しみに端を発している。谷口教授は平成5年4月に本学へ赴任されて以来、お亡くなりになるまでの長きにわたり、情報図書館学を専門として司書課程を支えて勤めてこられた。前述した、本学独自の共同演習形式の創始者でもある。

谷口教授の体調が思わしくない状況が続くなか、他の専任・非常勤教員が谷口教授担当授業の補講を担当することになった。その際、補講内で本学図書館の概要、司書の仕事内容や特色などについて学生に対して説明をしてほしいと図書館に依頼があり、それを受けて以降、本学図書館では今日まで司書課程授業の支援を行っている。その後、年ごとに時間や人員の多寡はあるものの図書館による授業支援範囲を広げていった。

ここでは、最初に「図書館サービス概論」、「図書・図書館史」を取り上げ、図書館から授業を支援する立場から述べる。次に、受講生からの振り返りシートの意見から得た感想と、実際に谷口教授（当時は助教）の授業を学生当時に受講した自身の経験を述べる。筆者は、谷口教授の共同演習方式で指導を受けた学生であり、それは現在の本学の司書過程における演習形式の原型ともいえるものであった。紙幅の関係で、その後の変遷を辿ることは今回できなかったが、TA制度、上級性による採点制度が取り入れられた時代についての記述は、現在京都市内の図書館に勤務されている元

英文学科研究室助手の市川真由氏（本学文学部英語・英文学科卒業・司書資格取得者）にメールでの質問に回答を貰うかたちで協力を得た。

### 1. 「図書館サービス概論」の支援について

シラバスにおける本科目の授業テーマは「現代図書館のサービスについて考える」ことであり、到達目標は「現代における図書館のサービスの多様な在り方の理解を深める」、「近年の公共図書館で開催されている様々な催しについての理解を深める」となっている。授業自体は公共図書館におけるサービスを中心に進められているが、担当教員から本学図書館において授業内で学生に対して「催し（イベント）」を体験させられないだろうかと相談があった。大学図書館のイベントとして思い浮かぶものには近年盛んに行われている「ビブリオバトル」というものが挙げられる。しかし、担当教員から打診されたのは「ブック交換」というものであった。ブック交換とは、公式ホームページの説明によると「2010年2月5日から始まり、フィレンツェ、ロサンゼルス、北海道から沖縄まで25都市で開催されている本の交換会のこと。決められたテーマに合った本を持参して、自己紹介をかねた本の紹介をした後は、本の交換をするといういたってシンプルなコミュニケーション型ブックトークイベント」であり、「日本国内や海外のブックカフェ、BAR、図書館、学校などで絶賛開催中。本を通じて参加者の人柄を知る絶好のチャンスになることから、新しい企業内研修や書店内のコミュニケーションツールとしても注目されている。」ということである。イベントの最後は、互いに持ち寄った本の中で自分が気に入ったものを持ち帰るといふところも特徴である。

ビブリオバトルが互いの本の素晴らしさを競い合い、判定されることに對し、このブック交換は交流に重点を置き、互いに本を紹介し、どの本にも勝ち負けがない。本学学生の気質を考えると、ビブリオバトルよりもこのブック交換の方が受け入れられやすいと思われ、実施に向けて調整を進めていった。ここでネックになったのが「自分の本」を最後に他の参加者へ「あげられるもの」であることだった。授業内で学生自身に本を提供させることはできないので、図書館内の本を自ら「選んで」紹介することとした。また通常は事前にテーマが発表されて本を持参するのだが、

今回の授業では当日発表、当日選択することとし、自己紹介と簡単な本の紹介コメントを書く名刺の代わりに、本学図書館のしおりをアレンジしたものを用意して使用した。

現在までに3回のブック交換を実施している。初回は受講生を3グループに分け、館内各階にあるグループ閲覧室と事務所内の部屋を使用し、当日は図書館からスタッフ3名が進行係として支援にあたった。その際、進行係の手際や学生の性格、グループ内での友だち関係等の影響も考えられるが、広くて使いやすいだろうと予想していたグループ閲覧室を使った2グループよりも、事務所の狭い部屋を使用したグループに活気があり、盛り上がりを見せていた。この点を教員と振り返り、進行係の役割も重要であるが、一人ひとりが離れて座ることができる空間よりも、否応なく近づくざるをえないスペースが、自ずとある種の近親感から発言が出やすく、活気が出るのではないかと考えた。

平成26年度からは館内に新しく設置されたアクティブラーニング・スペース内で、可動式の机とイスでグループごとに分かれて実施したところ、昨年度よりもどのグループにも活気を見ることができた。そこから、前述した「情報サービス論」などでも、教室である情報実習室とこのアクティブラーニング・スペースを併用することで、使用する資料について支援スタッフから説明を受ける場合や、グループ課題のパスファインダー作成時に実際に調べる時などにも、この利点を生かすことができた。

## 2. 「図書・図書館史」の支援について

シラバスにおける本科目の授業テーマは、「歴史の中でのメディアの変遷を図書や図書館の歴史から理解し、図書館についての理解を深める」となっている。また到達目標の中に「メディアの変遷について理解し、時代的な背景と共に説明することができる」、「書物の歴史やその収集・保存に関する図書館の歴史について学び、説明することができる」という点があげられている。

この授業の支援については担当教員と相談の結果、本学図書館所蔵の資料を用いて、現在の本という形態にたどり着くまでの歴史を辿りながら図書というものについて学生に知ってもらうことを目的とした。テキ

ストのイラストを見ながら座学で一方向的に説明を聞くだけではなく、実際にどんなものなのかを手にとって感じる経験をしてもらうことは大切であると考えた。本物が持つ力というのはやはり計り知れないのも事実である。そのため手にとってもらう資料については巻物、折本、列帖装、版本へと「本」の形態が扱いやすくなっていく変化を復刻本で体験してもらい、本物を見る経験としては版本自体の版本ではないが、どのように刷られてゆくかの参考資料として本学貴重資料である版画「鳥居清長美人画」とその版木を見てもらうこととした。

本学図書館では、国宝などの貴重な絵巻物や古典籍の復刻資料を多数所蔵している。これは元館長の高柳桃太郎教授の発案で、日本文学科をもつ大学図書館として巻物（復刻）をコレクションとしていく方針を打ち立てられたことによる。その後、歴代館長、事務室課長へとこの方針が引き継がれて現在に至っている。また平成10年、本学に大学院文学研究科（修士課程）を設置するにあたり、現在の本学図書館貴重書の大半を占める古典籍資料を準備し、所蔵している。これらの資料はその性質もあり、利用される機会が少ないのが現状である。貴重な資料であるからこそぜひ本学学生にも閲覧する機会を持ってもらいたいが、図書館での展示だけでは満足な機会を提供できず、授業内で教員の指導のもとでの閲覧利用も減ってきている。そこで「図書・図書館史」をその機会にすることとし、両方の体験ができる図書館ならではの支援を行うことができた。

本の変遷をアクティブラーニング・スペースで展示紹介し、復刻本に関しては説明後、実際に手にとってもらった。紙の質の違いや装丁、また触れることで実際に使いにくさや便利さを感じてもらうことができた。授業内での振り返りシートでも、それぞれの資料について、初めて見た印象や細かく本の感想が書かれていた。

## 3. 受講者の立場から

ここでは、筆者が学生当時に履修した「資料組織法Ⅱ」と「参考業務」について述べる。これらの科目では、いわゆる共同演習の形式が用いられていた。この両科目について、谷口教授（赴任時は助教授）が本学に赴任されて担当された科目であるため、筆者ら当時

の3回生がこの形式を用いて授業を受けた、第一期生であると推定される。この演習では、受講者を5名程度の班に分け、班の中でリーダー、サブリーダーを決めて班ごとにテーマを設定し、内容を検討しながら必要な資料を集めて「成果物」を作成する。途中で何度かの進捗状況の発表があり、最後に成果物を提出した後、教員に採点され順位がつけられる。これらは二つの授業に共通し、ほぼ以降の谷口教授による司書課程科目後半期の共同演習にも通じる形式であるといえるだろう。

当時の「資料組織法Ⅱ」は学内、学外問わず、テーマに沿った図書資料を集め、独自の工夫を凝らした目録を作成することが目的であった。「参考業務」も同様に、テーマに沿ったレファレンスツールを方法やツール自体のデザインを含めて作成することが目的であった。これらの作成に入ると、授業の最初に谷口教授から当日の説明や以後の連絡があるだけで、残りの時間は教室でグループごとに集まって話し合いもよし、谷口教授に相談するもよし、図書館に行って資料を探すもよしというかなり自由度の高い授業であった。当時は共同演習やグループ学習などという存在すら知らない学生である。しかしながら今回の振り返りにあたり当時の作成物を見直してみると、その利点を実感し、充実感を得ていたことがあらためて分かる。学生であった筆者の当時の拙い感想ではあるが、リーダーを務めた「資料組織法Ⅱ」の作成物の後書きに、「この目録をつくる作業を通して、目録をつくるということを学んだのだが、それにもまして、人と協力して一つのことをやりあげる苦しさ、楽しさ、喜びを今回得たように思う」と書き残している。また「参考業務」での筆者の班のリーダーも、「グループ発表ということで、班員が皆、団結して活動出来たことは、何よりも私達に喜びを与えたことである。この演習に伴い(略)協調の精神を学んだことは、これからの私達にとって、大きな財産となった」と書き残している。

筆者の場合は、グループ全員がクラスメイトであった点で、協力に関して非常にスムーズに進められたことは否めない。その後の、先輩による採点を取り入れた共同演習では、班員のまとめ方、仕事の振り分け方、仕事の出来・不出来等、人間関係に由来した問題も発生していたという。谷口教授は再三、このグループで何かをするということは社会に出たときに必ずどこか

でぶつかる壁であると言われていたという。仕事をするとしない人、それらの人員をどう上手く使うのか、役職を持った人はどう責任を取るのか。発表時には、人に評価してもらえる伝わる発表をするにはどんな工夫が必要なのかを模索する。それらの授業を通しての経験は、社会に出た時に必要なスキルとしての基礎になっているのではないかと、このことである。

筆者が受講したグループ学習方式とその後の共同演習形式の決定的な違いは、評価が谷口教授個人の採点ではなく、司書課程科目履修済み先輩学生、各班長を含む複数名での採点方式である点である。班長は、自班以外の作品をテーマ、内容、装丁などの項目で採点する。同様に、先輩学生と谷口教授も採点する(谷口教授の持ち点は学生よりも多かったようである)。学生は採点後に評価結果を谷口教授に提出し、どうしてこの点数なのかの理由を説明し、妥当との判断が出れば受理、出なければ再提出という、評価する側にとっても大変な作業が課されていた。その中でも特に良かった点は、物を客観的に見る訓練ができたことであり、各人の評価の着眼点の違いに新たな発見を得たことがあったという。

以上、本学図書館業務に関わる司書として、また学生当時の司書課程受講生の一人として振り返ってみた。筆者、協力者の市川氏共に、当時の司書課程受講を通じて授業の困難さを上回る楽しさ、充実感を得ていたということが共通の感想であった。

## VI おわりに

本学における45年以上にわたる司書課程を振り返った。

これまで意識することがなかったが、今回本稿をまとめるにあたり資料を調査したところ、本学における司書課程修了者(卒業時に司書資格を得た者)がこれまでに約3,000名にのぼることが分かった。これは、本学の規模を鑑みると予想以上に多く、そのことを知った筆者自身が大変驚く結果となった。それだけ大きな実績を残してきたのだということあらためて強く感じた。

ここまで述べてきたとおり、この課程で学修する内容は、図書館法という法律に規定された大枠に従ったものであるが、単にそれらを形式的に踏襲するだけで

はなく、図書館や司書についての教育として本当に意味のある教育内容、それらを効果的かつ受講生自身が自ら積極的に学んでいける様な教育方法等、本学独自の取り組みをおこなってきたことが分かる。図書館との連携、様々な現場実践の学び、学年を超えた上級生の関与、競争原理の導入といったものがその一例であるが、特に大きく、特徴的なものが共同演習およびその前身にあたるグループ学習という形式の学びではないだろうか。ここ数年、大学教育においては「アクティブラーニング」というものが注目され、様々な形でこの取り組みが求められるようになってきている。本学の司書課程におけるグループ学習・共同演習は、アクティブラーニングといったことが話題にも上らなかったような頃から、そこに含まれる要素を既に実践していたと言える。当時の大学では、大人数講義のような一方通行授業が当たり前だった中、司書課程の受講生たちには大変大きな負担となっていたであろう。途中で挫折しそうになったり、実際に挫折して資格の取得を諦めたりした学生も居たであろう。しかし、実際に受講し司書資格を取得した学生には、「司書課程の受講は非常に大変であったが、振り返ってみると得られたものが多く充実した学習ができた」と評価してくれる者が多い。

このグループ学習・共同演習という形式の授業を中心とした成果、受講生の高い満足度は、その授業の方式そのものだけでなく、これらを推進され授業も直接担当された、谷口敏夫教授の人柄にも大きく起因していると考えられる。谷口教授の独特なキャラクターや語り口は、授業を受けた学生の多くにとって忘れられないものとなっているであろう。

本学における司書課程のふりかえりを結ぶにあたり、ここにあらためて谷口敏夫教授のこれまでのご尽力に感謝を記し、ご冥福をお祈りしたい。

#### 参考文献等

- ・平成28年度履修のてびき 京都光華女子大学(2016)
- ・これからの図書館の在り方検討協力者会議司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について (報告) 文部科学省 (2009)
- ・これからの図書館の在り方検討協力者会議これからの図書館像 ～地域を支える情報拠点を目指して～ (報告) 文部科学省 (2009)
- ・京都光華女子大学平成 28 年度シラバス
- ・阿部智和 「人員間距離とコミュニケーション・パターン：コミュニケーション・メディアに着目して」 Working paper ; No. 039 (2006)
- ・佐古順彦・小西啓史編 「環境心理学」 (朝倉心理学講座 12) 朝倉書店 (2007)
- ・文部科学省生涯学習政策局社会教育課 “司書について”、[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/gakugei/shisyo/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/gakugei/shisyo/index.htm) (2016 年 8 月 15 日取得)
- ・公益財団法人図書館協会 <http://www.jla.or.jp/> (2016 年 8 月 15 日取得)
- ・文部科学省生涯学習政策局社会教育課「図書館に関する科目」新旧比較表 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/gakugei/shisyo/\\_icsFiles/afieldfile/2013/01/31/1330348.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/gakugei/shisyo/_icsFiles/afieldfile/2013/01/31/1330348.pdf) (2016 年 8 月 30 日取得)
- ・ブック交換公式サイト <http://bukubuku.net/> (2016 年 8 月 30 日取得)